

PIPILOTTI RIST / ピピロッティ・リスト YOUR EYE IS MY ISLAND あなたの眼はわたしの島

April 6 [Tue.]–June 13 [Sun.], 2021 / 2021年4月6日[火]–6月13日[日]
The National Museum of Modern Art, Kyoto / 京都国立近代美術館 [岡崎公園内]



《永遠は終わった、永遠はあらゆる場所に》1997年2チャンネル・ビデオ・インスタレーション(4分9秒、8分25秒)
京都国立近代美術館蔵。Photo by Alexander Trohler © Pipilotti Rist. Courtesy the artist, Hauser & Wirth and Luhring Augustine

このたび、京都国立近代美術館は2021年4月6日から6月13日まで、スイスを拠点に国際的に活躍する現代アーティスト、ピピロッティ・リストの初期作から最新作までを紹介する展覧会「ピピロッティ・リスト：Your Eye Is My Island—あなたの眼はわたしの島—」を開催いたします。

五感を刺激する心地よい音楽と、鮮やかに彩られた世界をユーモアたっぷりに切り取った映像による、ピピロッティ・リストのビデオ・インスタレーションは、国を越えて幅広い世代の観客を魅了してきました。本展は、身体、女性、自然、エコロジーをテーマとした作品およそ40点で構成。身体や女性としてのアイデンティティをテーマとする初期の短編ビデオやヴェニス・ビエンナーレに出品された代表作、自然と人間との共生をのびやかに謳う、近年の大規模なプロジェクション、映像と家具が溶け合ったリビングルーム、リサイクル品を活用した屋外作品まで、約30年間の活動の全体像を本格的に紹介します。ベッドでくつろぐ、食卓を囲むといった遊び心あふれる没入型の映像体験を通して、コロナ禍における鑑賞者と美術館の関係を再構築するとともに、現代社会における切実なテーマを鑑賞者の身体とともに少しずつ解きほぐす機会となるでしょう。

WHO IS ピピロッチェ・リスト

1. 本名エリザベート・シャルロット・リスト。「ピピロッチェ」は児童文学の『長くつ下のピッピ』に由来。

ピピロッチェ・リストという作家名は本名ではありません。スイスのザンクト・ガレン州グラブスに生まれ、幼少期から自分の名前が好きではなかったリストは、大学時代にこれまでの愛称「ロッチェ(本名シャルロットに由来)」と『長くつ下のピッピ』の主人公の名前「ピッピ」を組み合わせて新たな名前と人格を生み出したのです。最近のサインでは Pipilotti の「Pipi」を「 $\pi\pi$ 」と表記し、これは円周率=○を表す記号で、「二つの丸いかたち」が示すものは何かと問いかけます。韻を踏む英語の作品タイトルや展覧会名から窺える、遊び心あふれる彼女の言語センスにもご注目ください。

2. ビデオ・インスタレーションの先駆者

1980年代にウィーンの応用芸術学校、パーゼルのデザイン学校を卒業したピピロッチェ・リストは、知人の音楽バンドの舞台デザインや映像制作を担当していました。1986年に自身を撮影したカラーの短編ビデオ作品《わたしはそんなに欲しがりの子じゃない》をスイスのゾロトゥルン映画祭に出品したのをきっかけに、ビデオ・アーティストとしての道を進むことになります。

作家として大きな転機となったのが、1997年のヴェネツィア・ビエンナーレで発表され若手作家優秀賞(プレミオ 2000)を受賞した作品《永遠は終わった、永遠はあらゆる場所に(Ever Is Over All)》と《わたしの海をすすって(Sip My Ocean)》です。2つのイメージが重なりあうように投影され、新しい映像インスタレーションの手法を提示したことで注目を集めます。1980年代以降のミュージック・ビデオの手法を発展させつつ、ジェンダーや身体、自然との共生など現代社会に通底するテーマを扱ったリストの映像インスタレーション作品は、美術における映像のあり方に新境地をもたらしました。2000年代以降は、ニューヨークのタイムズ・スクエアのマルチビジョンでの夜間投影、ポンピドー・センター前広場への屋外投影、金沢 21 世紀美術館のトイレ内での作品設置など、ビデオ・アートの領域を越えて、私たちの日常生活と映像の関係のさまざまなありようを反映するように映像展示の可能性を広げてきました。



《わたしの草地に分け入って》(スチル) 2000年
シングルチャンネル・ビデオ・インスタレーション(9分52秒)
© Pipilotti Rist. Courtesy the artist, Hauser & Wirth and Luhring Augustine

3. いま、世界でもっとも活躍する女性アーティストのひとり

2008年ニューヨーク近代美術館、2014年ニュー・ミュージアム、2014年チューリヒ美術館、2016年シドニーのオーストラリア現代美術館、2018年ルジアナ近代美術館など近年では世界各国の主要美術館で大規模な個展が開催されています。日本国内では、これまで資生堂ギャラリー(2002年)、原美術館(2007年)、丸亀市猪熊弦一郎美術館(2008年)で個展が開催されたほか、瀬戸内芸術祭(豊島)や PARASOPHIA 京都国際現代芸術祭 2015 でのサイトスペシフィックな作品展示が話題を呼びました。



ニューヨーク近代美術館での展示風景 2008年 Photo: Frederick Charles
© Pipilotti Rist. Courtesy the artist, Hauser & Wirth and Luhring Augustine

WHAT IS あなたの眼はわたしの島

「Your Eye Is My Island—あなたの眼はわたしの島—」という本展のサブタイトルはピピロッチェ・リスト自身が付けたもので、明快なメッセージや意味が込められているわけではありません。ピピロッチェ・リストは、活動初期から一貫して人間の眼を「Blood-driven Camera=血の通ったカメラ」と呼び、創作活動において「眼」は重要なテーマです。それに対して「Island=島」とは、島国である日本を指します。「島」という単語には、日本好きでもある作家の日本への特別な思いが込められています。英語で読むと「アイ」が反復され、リストはこうした韻をふんだフレーズを、作品名などに好んで用いています。顔にあるふたつの円形はまるで海に浮かぶ島のような、という比喩にも受け取れます。

主な出品作品

1. 《永遠は終わった、永遠はあらゆる場所に》 Ever Is Over All

水色のワンピースと赤い靴を身につけた女性が、街を歩きながらシャグマユリ（クニフォフィア）の花の形をしたハンマーで、楽しそうに車の窓ガラスを次々と叩き割っていく様子がスローモーションで映し出されます。もう一方の壁には、赤い花のさまざまなクローズアップ映像が、オーバーラップして壁面に映し出されます。1990年代末以降、フェミニズムの記念碑的作品として数多くの展覧会に出品されてきた、リストの代表作です。自動車に象徴される男性的社会を花の棒で破壊する女性の狂気を、明るく開放的に描き出しているとも解釈でき、警官姿の女性が通りすがりに微笑みながら敬礼するさまは、まるでこの女性の行為を容認するかのようであり、その演出にはリスト特有のユーモアが表れています。本作は、リストを国内で初めて紹介した展覧会「身体の夢：ファッション OR 見えないコルセット」(1999年、京都国立近代美術館ほか)に出品され、2019年にはこの最後のアーティスト・プルーフを当館が購入・収蔵しました。



《永遠は終わった、永遠はあらゆる場所に》1997年
京都国立近代美術館蔵

© Pipilotti Rist. Courtesy the artist, Hauser & Wirth and Luhring Augustine

2. 《4階から穏やかさへ向かって》 4th Floor To Mildness

地球は表面の70パーセントが水で構成されていることから「水の惑星」とも称されます。リストはこの惑星を「Earth / 地球」ではなく「Water / 水球」と呼ぶべきと語っており、「水」はリストにとって創作上の重要なモチーフです。この作品は、作家にとっても馴染み深いチューリッヒ近郊を流れるライン川で撮影されました。川の中にカメラを潜らせると、そこには「まるでモネの《睡蓮》を水の下側から見たような景色」が広がっていたといいます。葉の裏についた小さな気泡、さまざまな生物、葉の虫食い穴から漏れてくる光、泥、藻など今まで見過ごしていた水の中の光景が、クローズアップでとらえられています。こうした水中で撮影された断片的な映像が、天井から水平に吊るされた雲のような形のスクリーンに投影され、観客はランダムに置かれたベッドに横たわって下から上を見上げるように鑑賞します。Soap&Skinが手掛けた重厚な音楽が流れる中、ベッドに横たわり映像を見ていると、まるで水中にいるかのような錯覚に陥ります。



《4階から穏やかさへ向かって》2016年

オーストラリア現代美術館での展示風景 Photo: Ken Leanfore
© Pipilotti Rist. Courtesy the artist, Hauser & Wirth and Luhring Augustine

3. 《もうひとつの身体》

《不安はいつか消えて安らぐ》

《マーシー・ガーデン・ルトゥー・ルトゥー／慈しみの庭へ帰る》

空や光、水、泥、動植物や虫、色鮮やかな花々と禁断の果実、そしてそれらに触れ、浸り、重なり合う人間—人間とその環境という共通した主題を扱う三つの映像作品において、リストは人間の身体と自然界を取りまくさまざまなイメージを混淆させ、明確な筋道を持たない夢の連なりのような映像を組み立てています。《もうひとつの身体》で夢想される楽園追放が起らなかった世界、《不安はいつか消えて安らぐ》で描かれる皮膚を介して浸透し合う身体の内側と外側、そして《マーシー・ガーデン・ルトゥー・ルトゥー／慈しみの庭へ帰る》が紡ぐ人間と環境にまつわる記憶の断片—穏やかで心地よいイメージに満ちたこれらの作品群において、眼は世界を愛撫する主体となり、光を感じる視細胞となり、またある時は子ブタと少女を見上げる周縁的な存在に憑依し、さらには空中遊泳する女性を見つめる誰かの白昼夢のなかへと潜り込みます。こうしたパースペクティブの移動が、表象によって構築された人間だけの世界を複数種が織りなすつながりの世界へと作り変えるのです。

Another Body

Worry Will Vanish Relief

Mercy Garden Retour Retour



《マーシー・ガーデン・ルトゥー・ルトゥー／慈しみの庭へ帰る》2014年
マルチチャンネル・ビデオ・インスタレーション (15分14秒)

© Pipilotti Rist. Courtesy the artist, Hauser & Wirth and Luhring Augustine

4.《ヒップライト(またはおしりの悟り)》 Highlights (or Enlighted Hips)

本作は、物干しのように吊るされたさまざまな白い下着(パンツ)がモチーフとなった屋外作品です。普段は自分自身か親しい人の目にしか触れず、慎ましやかに人体の重心を包んで下着が空中で軽やかにたためくさまは、その重さからの解放を象徴しているようにも見えます。下着はヒップ(臀部)のなかに収まったさまざまな器官の運動やそれらによってもたらされる極めてプライベートな官能を連想させ、また、誰もがそこを通り、真暗な胎内から光溢れる明るい世界へと生まれ出てきたことを思い起こさせます。吊るされた下着を見るとき、私たちはそのなかに詰まった重力にも似たものを思い描いては羞恥を覚え、いつか超自然的なものの介入によって解放されたいと願うのではないのでしょうか。不浄と浄化、公と私、無価値と価値など、リストの作品もまた、日常的に慣れ親しんだものが見せる世界の多面性に対して心を開くことを促しています。



《ヒップライト(またはおしりの悟り)》2011年

古着、銅線、LEDランプ/インスタレーション

ハウザー&ワース、サマセットでの展示風景 Photo: Ken Adlard

© Pipilotti Rist. Courtesy the artist, Hauser & Wirth and Luhring Augustine

美術館におけるリビングルーム

近年では、美術館の展示室でリビングルームのように身体を解放しながら作品を体験できる大規模なインスタレーション空間を演出しています。リストは、鑑賞者が自らの意思で作品とどのような関係をつくるのかに関心があると云います。リストの作品を介して人々が出会い行き交うシェアハウスのような場所が出現します。今回の展覧会でも、自宅できつろぐように靴を脱いで作品をお楽しみいただきます。



どちらもルイジアナ近代美術館の展示風景

© Pipilotti Rist. Courtesy the artist, Hauser & Wirth and Luhring Augustine

関連イベント

《イノセント・コレクション》のための廃材、大募集！！

作品制作のために、「透明」あるいは「白色」のパッケージを集めています。普段は捨ててしまう、あるいはご自宅に眠っている透明や白色のパッケージ、袋、布、紙、コード等を、美術館までぜひご提供ください。あなたの廃材が、作品の一部として生まれ変わるかもしれません！

*当館 HP にてピピロッチェ・リスト本人によるビデオ・メッセージを公開しています。あわせてご覧ください。



《イノセント・コレクション》1985-2032年頃

チューリッヒ美術館での展示風景 Photo: Lena Huber

© Pipilotti Rist. Courtesy the artist, Hauser & Wirth and Luhring Augustine

展覧会図録

当館 IF ミュージアムショップと通販にて販売予定

価格 未定

刊行 京都国立近代美術館

デザイン 岡崎真理子

*そのほかオリジナルマスクやステッカー、メガネクリーナーなど、本展オリジナルグッズをご用意しています



展覧会概要

「ピピロッティ・リスト：Your Eye Is My Island -あなたの眼はわたしの島-」

会期	2021年4月6日(火)～6月13日(日)
開館時間	午前9時30分～午後5時(金・土曜日は午後8時まで)*入館は閉館の30分前まで *新型コロナウイルス感染拡大防止のため、開館時間は変更となる場合があります。来館前に最新情報をご確認ください
休館日	月曜日[ただし、5月3日(月・祝)は開館]
観覧料	一般：1,200円(1,000円)／大学生：500円(400円) ※()内は前売りと20名以上の団体および夜間割引(金・土曜日の午後5時以降) ※ 高校生以下・18歳未満は無料*。 ※ 心身に障がいのある方と付添者1名は無料*。 ※ 母子家庭・父子家庭の世帯員の方は無料*。 *入館の際に証明できるものをご提示ください ※ 本料金でコレクション展もご覧いただけます
会場	京都国立近代美術館
主催	京都国立近代美術館、京都新聞
後援	在日スイス大使館
協賛	クヴァドラ
協力	株式会社長谷ビル、国立新美術館、ユニバーサル・ビジネス・テクノロジー株式会社
巡回	水戸芸術館 現代美術ギャラリー 2021年8月7日(土)～10月17日(日)予定

展示室内では靴を脱いでご鑑賞いただきます。靴下と靴袋をご持参のうえ、ご来場ください。

お問い合わせ

「ピピロッティ・リスト：Your Eye Is My Island -あなたの眼はわたしの島-」広報事務局(Nene Laco.(ネネラコ)内)

担当 和田

住所 〒531-0072 大阪市北区豊崎3-15-5 TKビル

TEL 06-6225-7885 / FAX 06-7635-7587 / MAIL pipi@nenelaco.com